
IS インフィニット・ストラトス ~影の月~

大木茶介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～影の月～

【Nコード】

N8187V

【作者名】

大木茶介

【あらすじ】

一夏の性格改変モノ。原作よりも影のある一夏の物語。

プロローグ（前書き）

i f のやり直しモノです。楽しめていただければ幸いです。

ブローグ

タッタッタッタッタッタッタ

「ったく、どうしてこうなった……！」

割りと広めの通路を走る。ここは公共の多目的ホールなのだが、

バラララッ！ バララララッ！

その場所に似合わぬ銃器の音が響いている。

（武装集団の襲撃？ ふざけんな。こちとら受験しにきただけなのによ……）

正直、いや正直じゃなくてもやめてほしい。そもそもこんなところを襲撃するのだから本当世の中はわからない。ここに何かがあると言った。この時期に特別なものがあつたとしてもマークシートと問題用紙くらいだぞ。だいたい何の目的があつて……っと、危ね。

通路を曲がったところに人の気配があつた。複数人いる。陰から伺うと人が四人いる。三人の男と一人の女性。男の方法は武装をしており集団の一員なのだろう。女性はスーツを着ておりこの施設の役員だろうか？ 男が壁際でへたり込んでいる女性を囲んで何かを話し合っている構図だ。

本当なら構わず逃げればいいんだろうが、体が助けに向かおうと動き始めている。自分のため息を吐きつつ様子を伺う。あちらはこっちにまるで気付いていない。……よし。

息を殺し、低い姿勢で、一気に駆け出す。

一人の、最も近い立ち位置にいた男の背後に間合いを詰め、後頭部を蹴り飛ばす。

「がつ……！」

その一発に確かな墜ちた手応えを感じた。

「なっ！」

「なんだ貴様！？」

間髪入れずに二人目の男の顎に裏拳を入れる。顎が揺れ脳震盪を起こし、昏倒する。

「ぐっ……！」

「っ！？ チイツ！」

三人目の男が拳銃を向けてくる。弾道から外れるように姿勢を低くし、空かさず間合いを詰める。

ドグウ！ ガッ！ バキイ！

ボディーブローを当て、体が海老反りになり下がってきた顔面に膝を当て、膝当てで上がってきた頭を殴り落とす。声を上げる間もなく三人目も倒れた。

本当に気を失ってないか一瞥する。二秒くらい様子を見るがピクリとも動かない。これならしばらくは起きないだろう。安全を確認し女性に駆け寄った。

「大丈夫ですか？」

「えっ、あ……ええ、大丈夫」

女性は思っていたよりも落ち着いていた。パニックになっていると思っていたが、割りと場数を踏んでいるのだろうか。胆が座っている。

「って、脚撃たれてるじゃないですか」

女性の太股の辺りから血が出ていた。訊けば、武装集団が侵入してきたときに撃たれたそうで、脚を引きずって逃げていたら囲まれたのだと言う。

持参していたハンカチを傷に当て、学ランを包帯代わりに巻き付ける。

「それより貴方、何者なの……？」

「受験生です。おぶりますから逃げるんで出口まで案内して下さい」

「あっ！ 待って！」

「？」

「あの、私の言う場所まで案内するから、そこまで私を運んでくれないかしら」

「??？」

「うえっ、埃っぽ……。ああくそ、またクモの巣付いた……」

「ねえ……どうしてこんなところ通ってるの？」

俺たちは今、天井裏の通気孔の中を通っていた。やはり人を背中に付けた状態での匍匐^{ほふく}前進はきつい。

「動けない人間一人背負って集団とやり合える自信がないだけです」
「うう……。ごめんなさい……」

バレないように物音はなるべく立ててはいないが、誰かが下を通るときはハラハラする。

しばらくして女性の息が荒くなっていることに気付いた。興奮とかそういうのではない。辛くなっているのだ。見てみると顔色も悪い。

「大丈夫ですか？」

「……ええ……。大丈夫……」

とてもそうには見えないし思えない。急いの方が良さそうだ。

「……多分、この辺り、なんだけど……」

「……つと、ここか」

女性の言う受験会場の扉があつた。運良く辺りに人の気配はない。天井の通気孔のカバーを外し背中 of 女性を落とさないように降りる。足音や銃声は遠くに聞こえる。部屋の中にも気配はない。扉をそつと開け、素早く中に入った。

「着きましたよ」

「……」

「？ ……っ！ ちょっと、大丈夫ですか！？ しっかりして下さい！」

「あつ……ハッ……ハッ……」

意識がなくなってる。ヤバイ、具合が悪そうではあったがどうし

てここまで酷くなって……？

ヒタッ

手が何かに触れた。

血だ。

赤い筋が傷に当たった学ランから伸びていた。

「クソッ、出血か！ 何かないのか……！」

きつく締め直すがそれだけでは心許ない。何か使えそうな物がな
いか部屋を仕切っているカーテンを開けた。

そこには、

中世の鎧を想わせる

『モノ』があった。

知っている。これは――

「^{アイエス}ISじゃないか……！」

通称インフィニット・ストラトス。

総ての性能においてありとあらゆる兵器を凌駕する飛行パスワード
スーツ。

ここはISの教育機関の受験会場だったようだ。テレビで見るよ
うな派手さはなく地味な印象を受ける。受験用の訓練機なのだろう。

それでも、兵器としては充分機能する。まさか、連中はこれを狙ったのか。

ISを使えばこの場を制圧出来るだろうが、仮にこの人が起きたとしてもとても動かせる状態ではない。それにこれは俺では動かせない。

ISは女にしか反応しない。原則、女性にしか動かせないのだ。

「……嫌になるなあ」

こんなとき、こんな状況下において、何も出来ないのは本当に、嫌になる……。だから、俺は……—

「せめてお前が、俺でも動かせたらなあ……」

自分ではどうすることも出来ないそれに、よしかかるように手を置いた。

そのときだった。

—キンッ

「——ッ——!」

一瞬で膨大な情報が頭に流れ込んできた。目の前のIS^{それ}が何の為のものなのか、一瞬で理解出来た。

—グウン

起動音が鳴りISが操縦者を受け入れる形態になる。

これは間違いなく俺に反応していた。

「こいつ、動くのか……!？」

——その日、世界を揺るがす大事件とともに、

俺の世界が変わった。

第1話

今、世界にはISと言うものがある。

インフィニット・ストラトス。篠ノ之東博士が開発した宇宙空間での活動を想定された飛行パワードスーツ。しかしそれは想定された目的には運用されず、世界を傾ける程の性能をもった兵器として運用され、諸々の経理を経て今やスポーツとして活躍している。

そしてそれは女性にしか動かすことが出来ない——はずだった。

四月頭。受験シーズンは過ぎ去り入学シーズンが到来。春の象徴である桜が咲き誇っている、そんな季節。

「はぁ……」

白を几帳面とした制服を着込んだ一人の少年がため息を吐きながらモノレールに揺られていた。

この少年もまた、今日が高校の入学式であり、新たな環境に期待や不安を胸に抱くところなのだが、様子を見るにどうやら不安がほとんどを占めているらしい。

高校入学自体は少年も有難いことだと思っている。しかし問題なのはこれから身を投じる学園にあった。

「……あれって男子の制服でしょう」

「……って言うことは、あれが織斑一夏くんなのかな？」

「……ねえ、テレビで見たのよりもかっこいいくない？」

同じ学校の制服を着た女子たちの会話が聞こえてくる。少年——

織斑一夏はまたため息を吐いた。

（どうしてこうなった……）

既に回答の出た自問自答だが、現実逃避の為にせずにはいられない。発端は二月半ばに起きたとある事件。

某公共施設に武装集団が襲撃。それを収めたのはISを装着した少年だという。

言わずもなが一夏のことである。それは『世界で唯一ISを使える男』として世界的ニユースとして取り上げられた。

（いや、あの時はそうするしかなかったし……。そもそもこんなことになるなんて思わないだろう。……思えなかった自分も浅ましかったかもしれないけど……）

元々言えば中卒で就職を考えていたのだが、周りからの強い押し（主に姉の腕力）で高校の受験を決めたのだ。

織斑一夏は家族が姉しかおらず、姉の仕事の稼ぎが良かった為不自由はなかったが、小さい頃から親のいない環境を知ってか早目に自立しようと決めていたのだ。

受験は学費が安く、家から近く、就職率の良い一夏にとって好条件のそろった『藍越学園』を受けるはずだったのだが、例の事件に巻き込まれてしまったのである。これが切っ掛けで別の高校に強制入学させられることになったのだ。

あのニユース以来自宅にマスコミ、各国大使、果ては遺伝子工学の研究者が押し掛けてきたのだ。他の国からの勧誘もあった。

その為、この高校入学には保護の名目があり、それなら通つているとある場所に引き籠ろうと思ったがその主に、

『華の十代、ましてや青春期に引き籠ろうだなんてとんでもない。』

それにこれは君にしか出来ない貴重な体験なんだから、これも人生経験の一つだと思って諦めて行ってきなさい。あ、そうそう、感想はメールで送ってね』

と言われた。ニタニタした顔が妙に腹立たしかったとか。

そしてそのぼやきをどこからか耳に入れた姉には、

『あんな奴ところにお前を引き籠らせるくらいなら、私が監禁してくれる』

保護ではなく監禁と言ってるあたり、これは脅しだと一夏は悟った。

（まあ、もう決まってたことだったんだけどな……）

この入学自体も悪い条件ではない上、保護に衣食住を無料提供してくれるのは大いに有難いことだ。

そう考えれば気は楽だった。

結局、自問の答えは出てしまい意識は現実へと戻ってしまう。

姉に入学祝いに買ってもらった携帯電話を取り出し、早速登録した友人知人の溜まったメールに目を通すが、『お前の学園の内部事情を教える』との内容のメールがほぼ全てを占めており、携帯端末での現実逃避もまた許されなかった。

携帯電話をしまい流れる景色を眺めることにした。

「あつ、見て！ あれじゃない？」

一人の女子の声にグループを作っていた女子たち全員が外に目を向ける。

まず目を引いたのは特徴的な形のタワーだった。どこぞの美術品を想わせるような造形だ。それを中心に様々な施設が建ち並んでいた。下手な遊園地よりも広いだろう。

あそこが、一夏が通うこととなる学校――

「『IS学園』……か」

ここまで来てしまった以上、もう腹をくくるしかないだろう。そう一夏は思っのであった。

「さて、いざ着いたのは良いが……」

場所はIS学園の校門をくぐって直ぐ。別に道に迷った訳でも行き先が分からない訳でもない。

ただ、同じくこの学園に入学し同じ様に目的地に向かい歩いている生徒たちなのだが……女子、女子、女子、女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子女子……女子しかない。一夏以外男子がいないのである。

IS学園はIS操縦者の育成、教育を目的とした施設でありIS操縦者は本来女しかないのだから当然と言えば当然である。

これは一種のハーレムに違いないのだろう。しかしハーレムを望まない者にとっては余り良いものではない。一夏もまた、この状況ハーレムに悪い気はしないが周りから注がれる興味と言う名の視線に気恥ずかしい意味で居心地が悪かった。

（取り付く島はないのか……！　せめて誰か知っている顔でも……）

別に顔見知りと言う訳でもないが、この状況では藁にもすがらうな思いだった。

「……………」

幾つもの視線の中に一つ、興味とは違う視線があった。一夏自身もそれは気になるものだった。

知っている、どこか懐かしいようなそんな感じだった。

その方向に目を向けると、知っている、否知っていた顔がいた。

「箒……………」

一夏のかつての幼馴染みで、六年ぶりに見る顔——篠ノ之箒だ。当然とはいえ最後に会ったときより別人のように成長しているが、顔つきや雰囲気は間違いなくあの幼馴染みのものだった。

幼馴染み——箒も一夏の視線に気付いたようだ。

見知った人物を発見し一夏は声を掛けようとしたが、

フイツ

スタスタスタ……

一夏が遅かったのか箒が速かったのか、声を掛けようとする前に顔を背けさっさと学園の奥へと行ってしまった。

（……………あれ？）

何もなかったかのように行ってしまった箒に一夏は面を食らってしまった。

（まさか……忘れられた？ いや、それなら端から見向きもしないはずだし……。ずっと連絡取ってなかったからな。もしかしたら嫌われたか……？）

少なくとも“楽しい学園生活”を送るのは難しそうだ。
そう一夏は思った。

第2話

（何が悲しくてこんな目に遭わねばならんだ）

入学式は、校長や代表の話は聞いても視線は一夏へ集中砲火だった。入学式中も教職員含めチラ、チラと見る者からガン見の者までいた。入学式が終わり、自分の組が書いてある紙を確認して決まった自分の組にへと一夏は向かった。この状況から早く脱したかったのである。

決められた自分の組、一年一組で席着いたのだが、

（さつきと大して変わってないし……）

結局、四方八方からの視線に晒されてるのである。しかも一夏の席は真ん中の列の一番前だった。

（一番ならせめて後ろがよかった）

授業中でも集中砲火をされることとなる。その手の感覚の強い一夏にとってそれはきついものだった。

その内慣れるし、こんなのがいつまでも続く訳がないし、いつか興も冷めるだろう。そう思うしかなかった。

（それにしても……見れば見るほど豪勢だなあ）

前にあるのは黒板ではなくスクリーン。机はシステムデスク。最新鋭の技術をこれでもかと詰め込んだ教室だ。教室と言うより講義室に近いかもしれない。

スーッ

教室の自動ドアの開く音がした。
そんなことをぼんやりと考えていると誰かが入ってきたようだ。

「皆さん、入学おめでとう。私は副担任の山田真耶です」

幼い容姿（下手をすれば中学生並）をした女性が歓迎の言葉とともに挨拶をする。それとともにスクリーンに名前が表示された。

（この人教師なのか。それにしてもこの容姿……これが噂の『合法ロリ』というやつなのか？）

と、一夏は少しずれたことを考えた。別にそれがどうと言うことはないのだが。

副担任の挨拶のクラスの反応は、

「……」

沈黙だった。

白けきった空気に副担任の教師——真耶はたじろいた。

「え、えっと、今日から皆さんはこのIS学園の生徒です。この学園は全寮制、学校でも放課後も一緒です。仲良く助け合って楽しい三年間にしましょうね」

「……」

「……じ、じゃあ自己紹介から……」

涙目になりながら自己紹介に進める。

そんな真耶を他所に一夏はずっと自分に視線を向けている筈に目

を向けた。

フイツ

やはりと言うかなんと言うか、一夏の視線に気付いた筈は顔を反らした。

ここまで来ると本当に嫌われているのかもしれない。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「あ、はい」

そうこうしている間に一夏の順番が回ってきた。

早いと思ったが、自分の姓の頭は『お』だから早く来るのも当然か、と一夏は思った。

「えっと、自己紹介『あ』から始まって今『お』なんだよね。自己紹介してくれるかな？ ダメかな？」

わかってるつつの

「分かりましたから、落ち着いて下さい」

「ひゃっ、ひゃい！」

「？ ……あ」

いきなり変な声を上げられたと一夏は思ったがすぐにその原因に気付いた。

真耶は一夏に順番が回ってきたのを教える際教卓から身を乗り出すような体勢になっていた。一夏は宿める言葉とともに立った。

その際、頭を撫でたのである。子供を慰めるように。

撫でてしまったのである。

自然にやってしまった。
完全に無意識だった。

やってしまった。

クラスの一夏への注目度が一気に上がった。
特に視線に威力のあったのは、さっき顔を反らしたはずの篤だった。

他の生徒と違い異様な威圧感を発している。すぐにでも斬滅されそうな、そんな形相が想像出来た。

「えと、すみませんっ」

「い、いえ、それほどでもないですから……」

でもなんで満更でもなさそうな顔するかな……。
真耶が教師をやっているのか一夏は少し心配になった。

(……それよりも自己紹介をすませてしまおう)

何事にも切り替えは重要だ。さっさと終わらせて次の人にバトン
を渡そう。夢うつつな真耶を他所に一夏は振り返った。
その光景に心の中でたじろいた。

(……想像以上だな、これは)

自分以外の一組の生徒、二十九人。全て女子だ。彼女達の視線が
一夏に集中している。

(……ええいつ、何してるんだ。こんなのさっさと済ませてしまえ)

これから肩身の狭い思いはするだろうが、何故実際に肩身を狭める必要がある？

身を縮みこませる必要がある？

彼女達に何か悪いことでもしたか？

それは否だ。自分が悪くなければ、例え惨めであっても堂々としていればいい。そこまで気を負う必要はない。

一夏は改めて心に整理を付ける。

息を吸い、軽く吐く。

一拍置き、口を開いた。

「お——」

スーッ

「なんだ、まだ終わっていないのか」

一夏の言葉は教室に入ってきた人物により遮られた。

それだけではない。一夏も止まっていた。

その声は一夏にとって聞き覚えのある、むしろよく知っている者の声だった。

一夏にとって、たった一人の、家族のもの——織斑千冬のものであったのだから。

「千冬姉!？」

ここにいると思っていなかった人物を目の前に思わず声を上げてしまった。

ヒュッ

刹那、千冬の手につく出席簿が一夏に向かって高速で振るわれた。

バシン！

一夏はそれを合掌、白刃取りで受け止めた。

ギリギリギリギリ

受け止めてもなお収まらぬ勢いに一夏は押される。

あらゆる意味で容赦のない人と一夏は知っているがあの出席簿は相当な威力だった。普通ここまでするだろうか。

「学校では『織斑先生』と呼べ」

「し、承知しました。織斑先生……」

「ふん、よろしい」

公私は分ける、とのことだ。

あそこまでしなくても分かっている、と内心で毒づいた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君、クラスの挨拶を押し付けて済まなかったな」

一夏は目の前の人物を改めて確認したが、狼を思わせる鋭い切れ目に、鍛え上げられた肢体にそれにもなう綺麗なスタイル。凜としたたたずまい。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ」

ああ、これ間違いなく俺の姉だ。織斑千冬だ。
現実を再認識している一夏を他所に、クラス全体に黄色い歓声が
沸き上がった。

「「「キャーーーーー！！！！」」」

「千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

ものすごい陶酔ぶりである。自分の姉にファンがいるのは知って
いたがここまで熱狂的だと一夏は思いもしなかった。

千冬はそんな生徒達を鬱陶しそうな顔で見る。
ファン

「……毎年、よくまあこれだけ馬鹿者が集まるものだ。ここまで
馬鹿者を集中されると仕組まれている気さえしてくる」

（俺もなんだか、この入学が仕組まれているものの気がしてきたぞ
……）

この担任のクラスに対して特に。

「お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そして付け上がらないように躑をして〜！」

「ここまでくると『お姉様』と言うより『女王様』のような気がし
た。

もはや崇拜の域である。

「で、これは何をしているんだ？」

「あ、はい。まずクラスの皆さんに自己紹介を――」

「成る程。で、終わったのか？」

そこで千冬は立っている一夏を見た。

一夏には千冬の目が自分だけ特別厳しいものを感じた。

「ま、まだです」

「時間が押しているんだ。早くしろ、この馬鹿者」

久しぶりに会ってそうそう馬鹿者呼ばわりだ。

それよりも何故ここで教師をしていたことを教えてくれなかったのだろうか？ 月一にしか帰宅せずにした理由を含めて話して欲しかったが、一夏はその事を頭の余隅に置いた。

それは今すぐしなければならいことでもないし、今するのはこの自己紹介兼挨拶を終わらせることだ。気になったことは後でゆっくり話してもらおうではないか。

再びクラス全体が一夏に注目する。

一夏は改めて口を開いた。

「織斑一夏。ISを動かせることからこの学園に入学することになった。期待を折るようで悪いが、ISに関しては素人だ。それでもまあ、ISのことも含めてこの学園生活を楽しめればいいと思っている。

……何とぞ、よろしく」

それが、織斑一夏の自己紹介兼挨拶だった。

本日未明、織斑一夏のIS学園での生活が、幕を開けた。

第3話

初日のSHRと一時間目は一夏が思っていたよりもつつがなく終了した。

IS学園はコマ限界までIS関連の教育をするため、入学式当日から授業を行っている。

今は一時間目後の休み時間である。

「……………」

一夏はうんざりしていた。

『世界で唯一ISを動かせる男』を一目見ようと、他の学年、組から生徒（全て女子）が一組の教室に集まってきているのである。

日本初到来のパンダのさながらである。

教室にいる女子も誰が一夏に話し掛けるか水面下の争いをしていた。

そんなことを一夏が知ったことではないが、自分に話し掛けるか掛けないかでオタオタしているのは分かっていた。

（話すならさっさとしてくれ……）

バツサリやってくれた方がまだ楽だ……。そっちの方があんたらも楽だろう。

そう一夏は思ったが、斜め上を行ったり思い通りにならなかったりが世の中の常だ。そんなこと分かりきっていた。

ならば自分で何とかすればいいだろうが、別に一夏はプレイボーイでもなければナンパ師でもない。この状況を自分で何とかしようと言う勇者あるいは魔王のような考えを実行する気は流石に起きなかった。

ただため息をこらえながらその時間が過ぎるのを祈るばかりだった。

（誰か助けしてくれないもんかなあ……）

思うだけではどうにもならないと言ったことも分かりきっていた。

――が。

「……ちよつといいか」

来た。

この中で全く浮わつきのない声。

思い当たる節は一人しかいなかった。

「箒か」

「……ああ」

IS学園に来てようやく言葉を交わした。

箒は一夏がかつて通っていた剣術道場の子で、一緒に稽古をしていた仲だ。

髪型は六年前に別れたときと変わらずポニーテール。若干しかめた顔をしているが、本人曰く生まれつき、らしい。剣道をしている為か『侍』または『日本刀』の言葉がよく似合う雰囲気纏っている。

おそらく何か話があるだろうと一夏は思った。

「話でもあるのか？」

「……ああ」

予感的中。

ここに來てない方がおかしいと思うが。

「じゃあ、行くか」

「? どこにだ?」

「屋上」

教室だとやたら目に付く。

何よりこの状況から脱したかった。

「……………」

「……………」

二人は屋上に出た。そこは春特有の優しい風が吹いていた。

話があるとのことで一夏は筈の言葉を待ったのだが、その言葉が
なかなか出てこない。

話があるのではなかったのだろうか。

「その、久しぶりだな……………」

「……………ああ」

結局、一夏から口を開くこととなった。

「いろんなところでそっぽ向かれたからな、嫌われたかと思った」

「別に……………そんなことはない」

「そうか。ならよかった」

一夏は内心安堵した。
正直不安だったのだ。嫌われていたらきつとこの学園生活、もっと苦労していただろう。

「じゃあ改めて、六年振りだな。久しぶり、箒」
「あ、ああ。久しぶりだな、一夏」

ようやく一夏は幼馴染みと挨拶をすることができた。

「にしても、変わってないな、お前は。まあ、おかげですぐわかったけど」

「う、うるさい。それを言うならお前こそ変わっていないぞ」

「そうか？ 昔よりマシに成ったつもりなんだが」

「いいや、変わってない。昔と変わらず、変なやつだ」

「……そうか」

一夏と箒のなれ初めは、小一の時。剣術道場に通うことになりその際に知り合った。

最初こそは仲は良くなかったが、箒が引越すころにはそれなりに付き合いのあった関係であった。

（……と思いたい）

今はどう思われているかはわからないが、忘れてくれない程度には良かったのだろう。

（……と思いたい）

リピート。

「あ、そういえば」

「なんだ？」

「去年の剣道の全国大会優勝したんだってな。おめでとう」

「なっ、なんで知ってるんだ！？」

「新聞に載ってた」

「なんで新聞なんか見てるんだっ」

「意味の解らんことを言うな。読んだっていいだろう」

新聞を読む理由を問うのもなかなか珍しいと一夏は思った。
世の中の情報を取り入れる為とでも答えておこつ。

「お前がここに来てたのは意外だったな」

もつと剣道の強豪で名の通った学校に行っていると思っていた。

「お前こそ、どうしてISなんかを動かしているんだ」

「俺が訊きたいよ、そんなの」

身体を調べれば解ることだろうが、ただ調べるだけでは済まない
ような気がし、一夏はIS学園に入学することにしたのだ。

あの時は、それは動かせると根拠のない確信があったのだ。

（今思えば不思議なもんだ。よく動かしたよな、俺……）

——キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴る。休み時間終了のお知らせだ。

「もう戻るか」

「わかつている」

早く戻らなければ千冬——織斑先生の容赦ない制裁が待っている。一夏が言い終わると同時に箒は歩き出した。待つ気はないらしい。自分の前を早歩きで進む箒の背を見る。

（嫌われてないようで何よりだが、少し冷たくなっただんじやないか？ ……いや、昔からああか。まあ会話出来るだけましだな）

そんなことを一夏は思った。

「——それでは今回の授業はここまでです」

二時間目もまたつつがなく終了。

始めの授業と言うことで難易度はさほどでもなかった。

しかし、約一名そうでもなかった人物がいた。

この教室の唯一の例外、一夏である。

全くついて行けない、と言う訳ではないがやっとやつの状態だった。

『聞くのは一時の恥、知らぬは一生の恥』とは言え、このままでは一時の積み重ねで一生分の恥を築いてしまうことになるかもしれない。

（こりゃ、要勉強だな……。放課後、山田先生のところに行くか……）

そうして、一夏は軽いため息をついた。

ISの分厚い参考書を取り出す。入学までの勉強に使った物だ。

付箋やアンダーバーが沢山付き少々くたびれている。

次の授業まで見直しをするようだ。

「ちよつと、よろしくて？」

誰かから声を掛けられた。
が、

「よろしくない。悪いが後で頼む」

即断わった。

「ちよつ、ちよつとお待ちなさい！ 何ですの、その態度は！？
わたくしが声をお掛けになったのですからそれ相応の態度と言つものがあるのではなくて？」

かなりの上から目線で食って掛かられた。
適当なものを参考書に挟み閉じる。

「……何の用だ？ と言うかどちら様？」

「このわたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリス代表候補生にして、入学主席のこのわたくしを！？」

代表候補生。

国家IS操縦者。その候補生として選り抜かれた者のことだ。
所謂、現時点でのエリートだ。

「いや、イギリスから代表候補生が来ているのは知っていたが、君
だとは知らなかった」

「自己紹介したはずですが？」

「結構衝撃的なことがあってな、よく聞いてなかった」

「落ち着いているように見えましたか？」

「そう見えるだけ」

早く用件を言ってくれないだろうか。

「あなた、今さらそんなものを聞いて何をしてらっしゃいますの？」

「次の授業の予習」

「……それでよくこの学園に入れましたわね」

「そんなこと言われても、入学は強制だったし、事前学習も一月^{ひとつき}ちよつとの付け焼き刃だ。一緒にされても困る」

「ふうん。でもわたくしは優秀ですから、泣いて頼めば教えて上げなくてもなくつてよ」

「わかった、考えとくよ」

「……それは日本語では『お断り』の同義語ではなくて？」

「そう言うケースが多いだけであって、全てがそうじゃないさ」

淡々と返される返答にその女子——セシリアは面白くなさそうな顔をした。

実際面白くもないが。

「ISのことはよく知らないが。そうだな……知っててイギリスとドイツとイタリアが次期主力機の第三世代機を選定してるところ、とかか」

バン！

机が殴打された音が響く。

「あなた！ 何でそのことを知ってますの！？ それは——」

ハッとすると周りを一通り見渡し、小声で言い直した。

「……それはまだ公開していない第三次イグニッション・プランの情報でしてよ。どうしてあなたが――」

キンコンカンコン

休み時間終了の鐘。
時間切れだ。

「……ッ お話はまた今度！ よろしくって？」

そう言い捨て席に戻って行った。

こちらとしてはよろしくないが、情報源は世界の情報に詳しい知り合いがいる、とでも言っておけばいいだろう。

これから三時間目の授業が始まる。
結局、ろくに予習は出来なかった。

第4話（前書き）

すみません。このごろ忙しくて……。

第4話

「どうも、ありがとうございました」

「い、いえ。これも教師の務めですから」

放課後。

別教室にて、一夏は山田先生の補習を受けていた。

放課後になってすぐ山田先生に補習を頼んだのだ。

『それってつまり二人つきりで……』と言いつつも、快く引き受けてくれたのだ。

補習と言っても、わからない所の質問をしていたくらいなのだが。

「それだけわかっていれば大丈夫な気がしますけど」

「はつきり理解しておきたいんですよ。中途半端に理解していても間違っていることがありますから」

「勉強熱心なんですね。先生感心します」

「不安なだけです」

現時点での必須事項で解らない部分はこの補習で理解出来た。

あとは自分で何とか出来るだろう。

「それじゃあ、俺はこれで」

そうして、一夏は補習に使っていた空いた教室を去ろうとした。

一夏はもう帰りたかった。

帰りたくて堪らなかった。

ここまで帰りたいと思ったのは一夏の経験上初めてだっただろう。休み時間、教室は女子女子女子でこった返し。常に視線を注がれ

居心地悪かった。中には大胆にも迫ってくる人もいた。それは放課後まで続いていた。

一夏が移動する度に付いてきて、昼休みの昼食では――このあたりで割愛とさせて頂く。

とにかく、居心地の悪さの連続で一夏は今精神的に色々キているのである。

さっさと帰ろうと帰路に着こうとするが、

「ああつ。ちょっと待って下さい」

引き止められてしまった。

「……なんですか？」

引きつりそうになる顔をどうにか留め振り返った。

「寮の部屋が決まりました。これ、部屋のキーと場所です」

「……………はい？」

そう言っ鍵と紙を渡された。

一夏は一週間程自宅通学とされていたはずなのだが。

「織斑くんには監視と保護を付けたかったそうなんです、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りに無理矢理入れたそうなんです」

「……それって同室になる人がいるかも、なんですよね？」

「まあ、そう言うことになりますね」

このIS学園は一夏以外は全員女子。

必然的に女子と同じ部屋で寝食を共にすることとなる。

この年代にそう言うことをさせるのは、あまりいいとは言えない。

「ちなみに無視したら？」

「拘束されます」

「何に？」

「政府にです」

と言うことは、この処置を取ったのもまた政府だと言うことだ。

「年頃の男女と一緒にさせるとか、大丈夫なんですか？」

特に政府の頭とか。

「それはこちらで調整しますから、それまで我慢して下さい」

「どれ位かかるんですか？」

「五月には何とか」

一ヶ月は待てと。

「……はあ、解りました。それなら荷物とかまとめるんで取り敢えず家に――」

「あ、いえっ、荷物なら」

「それなら私が手配してやった。有り難く思え」

「……………織斑先生」

いきなり割って入って来た人物に一夏は思わず苦い顔をしていまう。

「なんだその顔は？ 何か不満か？」

「いえ、別に。……ありがとうございます」

不満と言えば不満だ。

一夏の性分上、出来るなら自分の荷物は自分でまとめたい。それに千冬がまとめたなら必要最低限の物しか入っていないだろう。

「着替えと、あと携帯の充電器があればいいだろう」

やっぱり。

「それじゃあ、時間を見て部屋に行って下さい。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取って下さい。各部屋にはシャワーが付いていますが大浴場もあります。でも……今は織斑くんは使えません」
「あー、それは残念ですね」

現時点で一夏が大浴場に入るということは女子と一緒に風呂に入ることを意味する。

そんなことをしようものなら社会的、生命的に殺されてしまう。

風呂には入りたい。だが、さすがに命は惜しい。

「それじゃあ、私達は会議があるので、これで。織斑くん、真っ直ぐ寮に帰るんですよ。道草食っちゃダメですよ」

初めてのお使いに行く子供に母親が言う忠言のような言い方である。

そう言い残して山田先生と千冬は去っていった。

「……行くか」

二人の背中を見送った一夏は取り敢えず寮に行くことにした。本当は色々と見て回りたかったのだが、真っ直ぐ帰るように言わ

れては仕方がない。また後日にしよう。

それと周りも五月蠅くなってきた。

今は寮に向かう他ないだろう。

ため息を一つ吐きながら一夏は歩き出した。

……早く休みたい。

「1025、1025……っと」

山田先生にもらった紙の番号と寮の部屋のドアに書いてある番号を照らし合わせながら歩いていた。

「おつ、ここか」

目的の部屋に到着した。

鍵を挿入しドアを開ける。

「おお、すごいな」

まず目に入ったのは大きなベッドが二つ。

部屋は高級感に溢れ、下手なホテルよりもずっと良いものだ。

流石は世界のIS学園、と言ったところか。

「同居人がいるかもだったが、もういるのか？」

適当なベッドに腰掛け軽く部屋を見渡す。

自分以外の荷物が置いてある。そしてシャワー室から音が聞こえてくる。

「誰かいるのか？」

シャワー室の方からくぐもった声が発せられた。
どうやら同居人となる先人がいたようだ。

（おい、ちょっと待て）

そして、それは一夏には聞き覚えのある声だった。
シャワー室のドアが開くとタオル一枚の女子が現れた。

「ああ、同室になるものか。こんな格好ですまない。シャワーを使っていた。これから一年よろしく頼む。私は篠ノ之箒——」
「あ……………」

出てきたのは再会を果たした幼馴染みだった。

「……………い、一夏？」
「……………ああ」
「……………」
「……………」

……………。
沈黙。静寂。微妙な雰囲気場を包む。
その空気を先に破ったのは箒だった。

「みつ、見るなあ！」
「いや、わ、悪いっ」

タオル一枚でほぼあらわになった体を隠すように自分を抱きしめ

る簾に一夏は簾を視界に入れないように他所に顔を向けた。
きつく抱きしめることで押し上げられた胸はかえって隠れていない。

「……な、何故、ここにいるんだ？」

「なんて言うか、俺も寮の部屋が決まってな。それがこの部屋なんだが――」

それを聞いてからの簾の行動は速かった。

即座に立て掛けてあった木刀を手に取り、剣道上段の構えをとる。

「ちよつ、おま！」

低腰短歩で一氣に一夏に向かい間合いを詰める。

そして振りかぶられた木刀は一夏の方へ正確に――

「せいいつ!!」

――振り下ろされる。

ガッ!!!!

「!!」

「危なっ」

振り下ろされた木刀は一夏、ではなく床を穿った。

簾は驚愕していた。

さっきのは渾身の一太刀だった（タオル一枚とはいえ）。
しかし、

（かわされた……！？）

確かに当たる直前まで剣線は一夏を捉えていたが、打突の瞬間、一夏が剣線から外れた。

それはまるで消えたかのように見えた。

「あの……… 簾？」

「っ！ ふん！」

「うおっ！？」

再度振るうが、それも当たらない。
全てが、同じように、かわされる。

「このっ………」

さすがに一夏も黙ってはいなかった。

上段から振り下ろされる木刀に、

左手の甲を木刀の鎬しのに沿え、

軽く押す。

木刀は一夏から逸れ再び床を穿った。

下がった木刀を踏みつける。剣は上がらなければ振ることは出来ない。

「なっ！？」

瞬時に行われた単純かつ精密で正確な動作。

箒は一瞬何があったのかわからなくなる。

「いい加減……」

輪を作るように中指を親指に掛け、箒の顔上半分辺りに持つていく。

そして、放つ。

「落ち着けえい!!」

バチイイイインツ!!

「いいつつ!!」

デコピンである。

物凄いデコピンである。

音が既にデコピンの音ではない。

あまりの痛みにつづくまる箒。

「~~~~っ。な、な、何を——」

「それはこっちの台詞だ! バスタオル一枚で木刀振り回しやがって」

「……………。っ!!」

「はぁ……。詳しいことは話すから、まずは服を着てくれ。目のやり場に困る」

「……む」

「廊下に出てるから、着たら声掛けてくれ」

返事を聞かずに一夏は部屋を出た。

ボタン

「……ふう。まさかあいつが同室とはな」

なんだか本当に仕組まれている気がしてならなくなった。
ため息を吐きながらドアに寄り掛かる。

「あれー？ 織斑くんだ」

「あ、本当だ」

「えっ、どこどこ？」

一夏の存在を聞きつけ、他の部屋からも続々と女子が集まってくる。

気が付けば囲まれていた。

そしてラフな格好をしている子が多い。長めのパーカーを着ただけやらブラウスを羽織っただけやら。

（男の前ってことを意識しているんだろうか……）

少し心配になる。

自分に照れや興奮がない訳ではないが、あえて触れないことにした。

「ねえ、何してるの？ ここ織斑くんの部屋？」

「ああ。今は同居人になった人がお取り込み中でな、許しが出るまで待ってるんだ」

「えっ！ 何々？ 同居人いるの！？」

「誰々？」

「教えてー」

興味津々だ。

「箒……篠ノ之さんだよ」

「えっ！？　ねえ、それ本当？」

「篠ノ之さんってあの篠ノ之博士の妹なんだよね？」

ISの発明者、篠ノ之束。篠ノ之箒はその実の妹だ。

一夏も束とは面識はあるが、一夏の束に対する評価としては『天才かつ変人』『天災的天才』……とにかく『人災』の特異版のような感じだ。

それに千冬が高校時代、一緒に連るんでいたのも束なのだ。

そう考えると千冬も同じ『天災肌』なのだろう。

（うちの師匠と言い……俺の周りほとんどもない人ばかりだなあ）

自分も『とんでもない』存在に該当されていることはすっかり棚に上げている。

「篠ノ之博士の妹ならやっぱりISとかに詳しいの？」

「いや、あいつ束さん……自分の姉を敬遠してるからな。あまり姉のことには触れてやらないでくれ」

「そうなんだ……。そう言えば篠ノ之さんに詳しいよね。篠ノ之博士のことも何か知ってたりする？」

「ああ、あの人は――」

コンコン

寄り掛かったドアの内側からノックの音が出てきた。

「一夏、もういいぞ」

箒だ。着替え終わったようだ。

「悪いな。お話はまた今度」

彼女らに一言断りを入れ部屋にはいった。

部屋にいた箒は剣道着を着て奥の方のベッドに座っていた。

すぐ着れる服がそれしか無かったのだらう。急いでた為か帯の絞めが少し緩い。

（俺、ベッド奥の方がよかったんだけどな）

どうでもいいか、この際。

「お前が、私の同居人だというのか？」

「まあ、そうなるな」

「ど、どう言うつもりだ」

「あ？」

「どう言うつもりだと聞いている！ 男女七歳にして同衾せず！ 常識だ！」

「あのなあ……俺にはどう言うつもりもこう言うつもりも無いし、俺だってそう思ってるよ」

「なら何故——」

「だから落ち着けて」

食って掛かりそんな箒を制しながら一夏はもう一方のベッドに腰掛けた。

「実は無理矢理部屋割りに押し込まれたんだよ。政府が俺に監視と保護をさっさと付けたかったらしくてな」

「それで私と同室に？」

「ああ」

「そ、それは……」

「？」

「お前から、希望したのか？ その、私の部屋にしろと……」

「いや、偶然」

「……偶然？」

「そう、偶然」

「…………」

急にむくれだした。

「何むくれてんだよ。何か不満か？」

「……別に、そんなのではない」

「まあ、ならいいけど……」

と言っても実際は不満しかないだろうと一夏は思った。

大体の女の子は嫌がる状況だろう。

「五月には別の部屋が用意できるそうだから、それまで我慢してくれ。頼む」

「………ま……」

「……？」

「……まあ、仕方無いな。そう言うことなら」

「へ？」

意外だった。

箒^{かたがひつ}のことだから断固として同室は拒否されるものと思っていたのだ。

「な、何だ、その顔は」

「いや、それならよかったんだ。しばらく宜しく頼むな」

「あ、ああ、よろ——」

「それじゃあ、俺ちよつと出るから」

「なつ、ま、待て！ どこに行く!？」

「俺には確保しなきゃならないことが多いんだよ。トイレとかトイレとかトイレとかかな」

結局トイレだ。

本来女子しかないIS学園。男子のトイレがほいほい置いてあるとは思えなかった。

トイレの確保は重要である。

「じゃあ、また後でな」

「おい、待て！」

ボタン

遠ざかる足音。

……行ってしまったようだ。

「……………」

部屋に一人残った筈は、

「……………」

ボスッ

座っていたベッドに倒れ込んだ。

そして枕を絞殺出来そうな力で抱き締め始めた。

(い、一夏と……同室、だと……!?)

一夏と同室。それは箒をとても動揺させていた。
と同時に今更ながら嬉し過ぎて何が何だか解らない状態になっていた。

織斑一夏……。

それは幼馴染みであり、箒がずっと想いを馳せている相手。
箒の素直に成れない性格ゆえ、その想いは一夏に伝わっていることとは無いが。

(そ、それは、つまり、これから一夏と寝食を共にすると言っている……。同じ屋根の下ならまだしも、同じ部屋と言っている……)

武士道精神だの何だの言っても、華の十代。
恋する乙女の妄想は加速する。

「フ、フフ、フフフフフフ……」

脳内に再生されるのは、一夏と二人切りの――

ガチャ

「あー、悪いが箒。俺の荷物なんだが――」
「わあああああああああ……!」
「へ？」

篠ノ之箒の手により一年寮1025号室のドアは見事に真つ二つにされ、一目目にして新しいドアの申請が行われた。

第4話（後書き）

ドアく解せぬ。

第5話

「……いつまで怒ってるんだ？」

「別に、怒ってなどいない」

「怒ってないやつはそんな顔しない」

「これは生まれつきだ」

「……………」

翌日、朝。

食堂にて、一夏は箒と一緒に朝食を食べていた。

昨日、箒の破壊してしまったドアの申請しに一夏は寮長室に行つた。

『何だ？ 初日から何かやらかしたのか？』

昨日二度目のドッキリだった。

まさかの一年生寮寮長が織斑千冬だったのである。

「ああ、だから月一しか帰ってこなかったのか」と納得しつつ取り敢えず、ドアが箒に破壊された為ドアの申請をしに来たことを説明すると、

『お前、篠ノ之に何かしたんじゃないか？』

と言われた。

無論、一夏は抗議した。

機嫌を悪くした箒からは、

『お前が悪い！』

と言われたが、そんなことを言われるようなことをした覚えはない。

ドアが破壊された経理を話すと、千冬は何かを察したように、

『……確かに、お前は悪くはないだろう。しかし、ここは大人しく引き下がっておけ』

と諭された。

暫く見ていない優しげな千冬を久々に一夏は見たような気がしたそう。

ドアの申請を終え、一方的な筈の説教を聞き流し、その日を終えたのだが、

——筈の機嫌は一向に悪いままなのである。

一応、同室のよしみで同じテーブルで席を並べて朝食を摂っているのだが、会話らしい会話は全くない。

（昔からズルズルと長ったらしく引きずるからな……。勘弁してくれ……）

隣から不機嫌時特有の威圧を発せられては食も進まない。

（旨いのにな……）

早く機嫌を直してくれ、と言うのが今の一夏の心情だった。

「織斑くん、隣いいかなっ？」

「？」

声の方を向くと朝食のトレーを持っている女子が三人が立っていた。

「ああ、いいよ」

「ありがとう。……やった」

「……イエーイ」

了承の返事をもらった三人は、一人はガッツポーズ、後ろ二人はハイタッチをし、一夏の空いている方の隣に座った。

それに周りから妙なざわめきが起こる。

今日も昨日と同じく周りの女子達は興味を向けつつ一定距離を保っている。このように声を掛けることは結構踏み出した行動なのだろう。

「あれ？ お前、布仏か？」

「あー、オリムーやっとな気付いてくれたー」

「……！（ピクッ）」

三人の内、一夏が一人知っていたようだ。

筈もそのことに反応するが黙々と食事を続けた。ただし、興味があつたことを全く隠せていない。

「え？ なに？ 本音ちゃん、織斑くんと知り合いだったの！？」

「うん、そうだよー。中学のとき家の用事でねー」

「それって、もしかして二人って結構深い仲だったりする？」

「いや、その日その時偶然会ったような感じだし、そこまで頻繁に会うこともなかったし、深い仲って訳じゃあ……」

「オリムー、その言い方はないと思うな」

「あー、ごめんごめん。悪かった」

彼女は布仏^{のほとけ ほんね}本音。

おっとりのおんびりとした雰囲気のお嬢さん、愛称付け癖のある女の子だ。――

夏は『オリム』と呼ばれている。

過去に同じ学校に通っていた訳ではないが、中学のとき、ひよんな事情から知り合ったのである。

「やっぱり、あの二人もいるのか？」

「うん。来てるよ」

「なら簪かんざしの方には顔出しとこうかな」

「あれ？ たっちゃんは？」

「あの人は自分から仕掛けてくるだろ」

「え〜。そんなでいいのー？」

「いいんだよ、あの人は」

「……………ずいぶん、楽しそうだな」

「ッ……………簪……………」

いつの間にか蚊帳の外にされていた簪が言葉を発した。

放置されていた為かさらに機嫌が悪くなっている。禍々しいオー

ラのみたいなのが見えるレベルだ。

「……………私は先に行くぞ」

「あ、ああ……………。また後でな……………」

食事を終えた簪は、重苦しい空気を置き土産に行ってしまった。

「……………はあ」

「あははー」

「……………」

その空気の重さに簪も会話も止まる。
約一名はさほどでもなさそうだが。

「そ、そいえばさあ！ 織斑くんって朝いっぱい食べるんだね！」

堪えかねた一人がどうにか空気を破ろうと一夏に無理矢理会話を振った。

「あ、ああ、まあな」

それに対し、彼女らの朝食は少なかった。

飲み物と、パンを一枚と、おかずが少しだった。

気になりはしたが大きなお世話だと思い、口に出すことはしなかった。

（どれくらい食うなんて人の勝手だからな）

人がとやかく言うことではない。

「さっきまで篠ノ之さんと一緒だったけど、織斑くん、篠ノ之さんと仲いいの？」

「ああ、幼馴染みなんだ」

「「ええ！？ 幼馴染み！？」」

三人の声が重なった。

「小一のとくに剣術道場に通うことになってな。その道場があいつの家だったんだ。小四のときに箒が引越してそれきりだったんだけどな」

貧乏だったあの頃はよく篠ノ之家に夕食に招待されていた。

一夏と箒は二人の性格もあり、初めの仲は良くなかったが、同じ

門下で同じ道を歩んで行く内に、それなりに悪くはない仲になった。
ちなみにこれは一夏の見解である。

（同じ道か……。まあ、今は違うか）

箒が引つ越した後、一夏は別のとある道場に通い始めた。

一夏にとって同じ門下、同じ道はかつて話だ。

口に出したりはしないが。

「ねえ、昔の篠ノ之さんってどんな感じだったの？」

「思い出話もいいが、早く食わないと遅れるぞ」

「あつ、いけない！」

「確か一時間目は、織斑先生だったはず……。大変！」

「遅れちゃう〜」

三人は食事のペースをあげる。

遅れてはどんな制裁がまっているか、担任が千冬なのだ。想像に
難くない。

千冬を、おそらくこの学園の生徒の中で一番知っている一夏なら
特によく分かっていることだ。

一夏も自分の朝食の攻略に取り掛かることにした。

「それではこれより再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決
める」

一時間目の授業の始め。

千冬の高らかな声が朝の教室に響いた。

一夏は何のことかと頭に？マークを浮かべる。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、平たく言えばクラス長だ。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいろ」

（うわっ、面倒くさ……。取り敢えず、俺はしたくないな）

そんな役職に就く気はない一夏は無関心を決め込むことにした。

「自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

誰かがなってくればいい。そんな気持ちで。

「はい」

早くも一人、手が挙がった。

「織斑くんを推薦します！」

（……………あれ？）

挙がったのは自薦ではなく他薦だった。

「私もそれがいいと思います！」

「では候補者は織斑一夏……。他にはいないのか？ いらないなら無投票当選だぞ」

いつの間にか、それで決定みたいな空気になっていた。

「ちよっ、ちよっと待って下さい！」

「なんだ織斑？ 何か意見でもあるのか？」

「さっきの説明から察するに、クラス代表者って言うのは結構な重役なんですよ。」

「そうだ。今後のクラスの指揮に関わる」

「こんなノリで軽く決めることじゃないでしょう！」

「そうですね。こんな選出、納得がいきません！」

後ろから机を殴打する音と共に聞き覚えのある声が上がった。

昨日、一夏の下に尋ねてきた代表候補生、セシリア・オルコットだ。

「クラス代表と言うのは本来実力トップである者務めるもの。こんな物珍しいと言うだけの選出は認められませんか。クラス代表はこのわたくし、セシリア・オルコットですわ！」

（えらく大きく出たな……）

とはいえ、彼女は代表候補生だ。

実力とそれに見合った自信があつてだろう。

「わたくしは入試主席。そして唯一教官を倒したエリートです。選ばれるのは当然ですわ！」

「ほう」

教室がざわめき出す。

IS学園の入試はISを動かし教官と戦うと言うもの。

それで教官を倒していると言うのは、相当の実力を意味する。

「しかし、それを選考基準としては、その男子も該当されることになるな」

「！ ちよつ」

「なつ、なんですって!？」

今度は教室がどよめき出した。

要約すれば、一夏も教官を倒したと言うことになる。

「その方も教官を倒したと言うの!？」

「ああ。コテンパンにしてくれたな」

「いや、ちよつと待って、待ってくれ。いや、待って下さい」

さすがに一夏も黙っていられなくなった。

「あの試験はISの稼働と適性値を確かめるものであって、勝ち負け云々は別に重要じゃないですよね、山田先生」

「へ!？ わつ、私ですか!？」

千冬に振れば、望まぬ形で返してくるに違いない。

セシリアに振れば、おそらく煽る結果で終わる。

箒が返してくれる訳もない。

クラスに振っても微妙な空気になるだけだ。

となれば頼れる、もとい使えるのは真耶しかいなかった。

一夏がコテンパンにした人物なのだが。

「まあ、確かにそうですね」

期待通りの答えをくれた。

「なら――」

「ですが、それだけISを動かせると言うことで高く評価されますね」

「……………」

……のは一夏の早合点だったようだ。

「ずいぶんと遠慮しているな？」

「……そりゃなあ、」

一夏が席から立ち上がる。

「確かに、動かすことは出来る。でも経験も薄い上に知識もそうない。俺よりももっと経験も実力も確かな人がするべきだ。こう言うことはちゃんと審議して決めるべきだと俺は思う」

不思議と一夏の声は教室の端から端まで響いた。

その言葉にクラスは静まりかえる。

「本音は？」

「クラス代表とか面倒臭いです」

ゴチャッ！！

生々しい打撃音と共に、一夏の頭に出席簿の角が刺さった。
軽く流血沙汰である。

「形はどうあれ、貴様も選ばれたんだ。選ばれた以上拒否権はない。覚悟をしろ」

「……いつて。ならどうしろと」

「決まっています」

セシリアは一夏に面と向かって、人指し指を突き付け、

「クラス代表の座を賭けて、決闘ですわ！」

盛大な宣戦布告発言をした。

ここはIS学園。決闘と言えばIS戦しかない。

「そんなことしなくたって——」

「いいえ！　ここで実力をハッキリしておくべきです！　このままではわたくしのプライドが許しませんわ！」

（お前のプライドなんぞ知るか）

「では決まりだな」

「ちよつと！　千ふ、織斑先生！　いいんですか！？」

「立候補が複数上がった場合、このような決め方はここでは珍しくない」

「ですけど……」

「なんだ？　出来ないのか？」

「——ッ」

この言う時、一夏は千冬に対し、幾度となく思想したことを思った。

この時、自分が『いいえ』と言えないのを分かっている。

分かっている、煽るようなことを言う。

そして、こう思う。

卑怯だなあ……

と。

「オルコットさん。決闘、受けよう」

「あら、ようやくやる気になりましたの。わざと負けたりしたら許しませんわよ」

「分かってる」

「そうですね。ビギナーズラックとしてハンデでも付けて差し上げてあげましょうか？」

「……一つ言っておくが、余計な言葉や挑発は必要ない。本当に『勝負』がしたいならな」

「ッ……！」

対峙しているセシリアが息を呑む。

一夏の雰囲気が変わった。

いつもの落ち着いた雰囲気ではなく、隙のない、どこか玄人じみた雰囲気を纏っていた。

二人の間に殺伐とした空気が流れる。

『ISを動かせる男』と『イギリス代表候補生』が睨み合う。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくように」

誰も触れそうにない状況を千冬が強引に納める。

「それと織斑」

「はい」

「顔を拭け」

ドロリ

「……………」

やけに顔を青くしている人が多いと思えば、すっかり忘れていた。

「これしたの織斑先生ですけどね」

「やかましい」

理不尽である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8187v/>

IS インフィニット・ストラトス ~影の月~

2011年10月31日01時18分発行